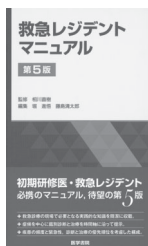


書評

〔評者〕

行岡哲男

日本救急医学会代表理事／
東医大主任教授・救急医学



本書は読む前にまず手に取り、その感触を確かめてほしい。サイズ、重さのことである。白衣に入るが、少し重くこれが存在感を感じさせる。この重さが不思議なことに安心感につながる。そしてポケットからこれを取り出してほしい。入れる動作より、取り出すのが容易である。臨床現場で持ち歩くべき本書は、取り出すこと(ほしい情報にたどり着く過程)がスムーズでなければならない、その点で心地良い本である。

ページを閉じたまま前小口(背表紙の反対側)を見ると、各章の分量が青い色分けの厚さでわかる。最も分厚いのは第4章「症候からみたER診療」である。救急診療は症候論的アプローチが重要であり、本書の執筆姿勢をこんなところからうかがうことができる。

さて、本のページを開いたら468ページから始まる「資料」を確認してほしい。救急診療やその後のカンファレンスで「えっ、あれは……」と確認したい資料が並んでいる。その前の「救急医療関連事項」も、現場で確認を要することが並べられている。版を重ねる本には特徴があると思う。読み手(本書の場合はエンドユーザー)への配慮である。特に実用書では、これがきわめて重要であり、本書が版を重ねてきた理由もここにある。既に述べたように第4章が最も分量が多く、そのなかでも、38ページから60ページまでの「ショック」は編者らのライフワークでもあり内容が充実している。

救急レジデントマニュアル 第5版

相川直樹 監修

堀 進悟, 藤島清太郎 編

●B6変 頁536 2013年

定価 4,800円+税

[ISBN978-4-260-01874-6]医学書院刊

本書には全編を通じ「POINT」と表記された記述が約140項目ある。本書を使い込んだ人は、これを通し読みすることで本書の内容を総覧し再確認することができる。情報の粒度は必ずしも統一されていないが、これは気にならない。「POINT」はまとめではなく、それぞれの執筆担当者がどこに力点を置いたのか、その執筆者の思いが凝縮したものである。したがって、初読者がこれを読んで本書の内容を理解しようとするのは間違いである。

本書の使い始めの段階では、自分が経験した事例を、直後に当該事例の記載頁で確かめることになるだろう。または、診療には必ず間があくときがある、その間に当該事例にかかわる記載内容を確認にして、これを手掛かりに次の診療の展開に備えることができる。しかし、それにはあらかじめの通読が必要になるが、その価値はある本だと思う。

「第5版の序」にも書かれているが、本書は線を引いたり、書き込みをして使うべきものがある。しかし、コンパクト性を追求した結果か、書き込みのスペースは限られている。各節の終わりのスペースを活用する必要もあろう。この場合の書き込みには、関連ページの記載が必要であるが、この自分の書き込みを自由に使えるようになれば、それが本書を卒業するときとなろう。レジデントが本書を使い込み、これを窓口として救急診療のより深部へと進むことを願っている。